



—方言と大日向の昔の暮らし—

大日向の幼馴染の菊池昭雄さんと菊池高明さんに方言手拭いを見ながら、昔の暮らしについて教えていただきました。

「おしかけ」意味：ご飯を炊くこと

「おざら」意味：うどん

昭雄さん「こころ辺の人は、開田作りで働いてたから忙しくて、『昭雄、おしかけだけやとけよ。』ってよく言われた。」

高明さん「うどんのことって『おざら』だな。『ほうとう』ともいった。平べったくして切って。あと『おつみこ』っていうのもあって、ちょこん、ちょこん指でちぎって。すいとんじゃなくて、おつみこって言ってたな。つまんでいれたからおつみこかな。それにお皿みてえにフライパンでお粉を焼いたのを、お皿焼きって言って食べたな。」

～方言から話題は昔の食べ物に～

「ほっかむり（ほっかぶり）」意味：頭をおおうこと

昭雄さん「なんせ、けえってきたって、おやつなんてねえんだから。塩でおにぎりにぎるか、味噌つけるか、きゅうりに味噌付けて食べるか。ほとんどねえわ、店が。農協と菊池商店とちょっと売ってるぐらいのもんだから。」

高明さん「後は、下からたまに豆腐屋が売りに来て赤い旗立っとくと止まってくれたよ。」

昭雄さん「あと納豆屋のおばちゃんが、すげえいい声で、『なっと、なっと～』手拭でほっかぶりしてさ、自転車ですりに来てよく買ったよ。」

～苦労したが不便ではなかった暮らし～

水も現在は上下水道が通る地域だが、昔は一苦労だったそうだ。

昭雄さん「水は、^{かみ}甕なんだよ。だから、農協の前の井戸に1列に並ぶだよ。井戸は、自分ちにある家と無い家とがあっただよ。バケツに入れてな、何べん通ったかわからねえ。」

昭雄さん「商店があって、役場があって、農協があって、駐在所があって、郵便局があって、桶屋さんがあって、全部並んでた。」

高明さん「今は、無くなっちゃったな。」

昭雄さん「役場の裏には、保健所があって、頭が痛えていえば、そこいってな。なんか、練り歯磨きみてえのほらこれっぬれってくるくる巻いてな、そんな適当なあれだったわ。」

高明さん「その後、ソウシン電機がここに来て、おらちのお袋もそこで働いてたよ。弱電やってたな。かなり長くやってたよ。小学校の帰りに良くそこへ寄り道して家に帰ったな。」

昭雄さん「昔は、人口が多くて盛んだったよ。まさかこんなになるとは、思わなかったけどな。減る一方だよな。」

人口が減って世代も後に続く人がいないことが話題になりました。

お話を伺っていると方言と共に思い出される時代、家族の名前、友人、近所の方たちの顔が蘇えり和やかな空気感になりました。

『方言』は、人の中に生き、人を通して紡ぎ、その土地その土地に残る言葉のふるさとなのだと気づかされました。
(文責 大波多 志保)



信州佐久の方言手ぬぐい



中学生の昭雄さん
～親戚の子ども達と炬燵で～



小学生の高明さん
～祖母、母、叔母、従弟と自宅前で～

佐久穂 集落 note

その他記事等は公式noteにて公開中

「佐久穂100年の記憶～古い写真を訪ね歩く～」

写真プロジェクトでは、カメラも珍しい時代の貴重なお写真とエピソードを聞かせていただき、インターネット公式noteに公開してきました。佐久穂町内の皆様に広くご覧いただけるよう、展覧会を行います。

期間

令和6年2月23日(金)～3月5日(火)

場所

茂来館一般ギャラリー(図書館入口前)



中畑と人の暮らし

水上隆雄さんは、中畑で生まれ、育った。

「子どもの時の思い出と言えば、今の千曲川より川幅があり、水量もあったので、先輩から往復泳いで来いと言われ、必死になって泳いだ記憶がある。」

「親父さんが専業農家で、お米と養蚕をやっていた。家には乳牛1頭、鶏、山羊、兎を飼っていたので、エサの草取りが忙しくて、遊ぶ時間はあまりなかった。乳牛を外に連れ出し、道の端の草を食べさせるのが毎日の日課だった。」

「それでも、冬なんかはホ～、親父が作ってくれたソリで滑ったことが楽しかったな。中畑には同級生が7人いたし、母親は高根の出だから、高根にも友達がたくさんいて、時間があれば遊んだ。」

隆雄さんの母親は現在111歳である。長野県一の長寿者である。薬は飲まず、血圧正常、内臓は丈夫、食欲がある。長寿の家系だそう。

45年続けた仕事をやめ、田んぼと畑で野菜を作る毎日。化学肥料は使わないし、消毒もしない。出荷するわけでないの、出来栄にはこだわらない。収穫した野菜の一部は高齢者施設に寄付する。

「冬になると、夕方はジョギング。その途中で、家のお墓に手を合わせ、十二明神社（じゅうにみょうじんしゃ）と虚空蔵（こくぞう）さんに手を合わせ、お賽銭をあげる。家まで戻るとちょうど5000歩になる。これが毎日の日課。」今生きている自分は先祖のおかげで、無事生きられていることに感謝する意味で、手を合わせるのだという。

「あまりテレビは見ない。ニュースと池上彰の番組だけは見る。世の中の動きが分かるから。それ以外は本が好きだから本を読んでいる。2、3日前に買ったという三島由紀夫の本を4冊見せてくれた。三島の生きざまが知りたかったからだという。ふすまを開けると、本が積み上げられていた。」

隆雄さんの話を聞いて、久しぶりに信州人は勉強家だと実感した。

宮嶋達也・舞夫妻は、中畑に暮らし始めて3年になる。達也さんは白馬村出身、舞さんは東京都出身。二人ともJICA青年海外協力隊員でアフリカの西海岸にあるセネガルで活動してきた。達也さんは野菜栽培隊員、舞さんは環境教育隊員であった。達也さんは2年の活動を通して、自分の野菜栽培の技術力のなさを痛感、佐久穂町で有機農業を営む『のらくら農場』に就職、7年間を過ごす。その後独立して3年になるが、有機農業経営は楽ではない。それでも、一番のやりがいは、野菜栽培において『創意工夫』がたくさんあり、試したいことは一杯あるという。すべて自分次第などところがあるので農業は楽しいという。

舞さんは、現在4歳と6カ月の男の子たちの育児に忙しい毎日を過ごしている。舞さんは、環境教育で赴任した先が海岸に近い、世界遺産で知られるフランス統治時代の建築物が残る町サンルイで2年間を過ごす。「印象に残ったことは、挨拶言葉です。人が出会うと先ず『ジャム』と言います。意味は『平和』。『平和かい？』『平和だよ』という会話から始まるセネガル人の穏やかさに癒されました。それに『おもてなし文化』を持っているので、いつもお茶を飲んでいきなさい。ご飯と一緒に食べていきなさい、とよく言われました。」

2年間のアフリカ生活から佐久穂町に移住して違和感はありませんでしたか、と聞くと、「アフリカに2年間住んで実感したことは、どこに住んでも人間は同じだということ。だから違和感はありません。」と、達也さんは言う。

「野菜は10品目程度で、まだまだ学ばなければいけないことが多いのですが、それだけやりがいも大きくなってきています。」



さくほ集落の話の聴き手 公式note
<https://note.com/sakuhosyuraku>

(文責 西村寛)

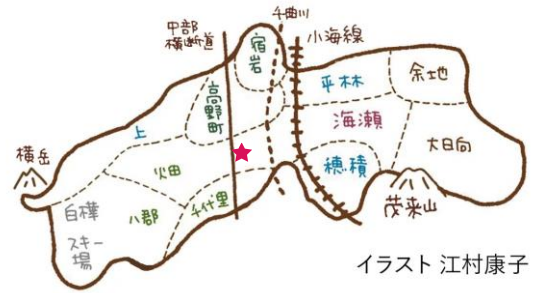


イラスト 江村康子



収穫した下仁田ねぎの前に立つ水上隆雄さん



畑の前で 宮嶋さん一家



発行・問合せ：佐久穂町役場 総合政策課 政策推進係

TEL.0267-86-2553 〒384-0697 長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地

